

## 東国に下った仏教者と在地武士

— 親鸞・忍性と宇都宮氏の一族 —

野 口 実

はじめに 十二〜十三世紀に活躍した僧たちの出自

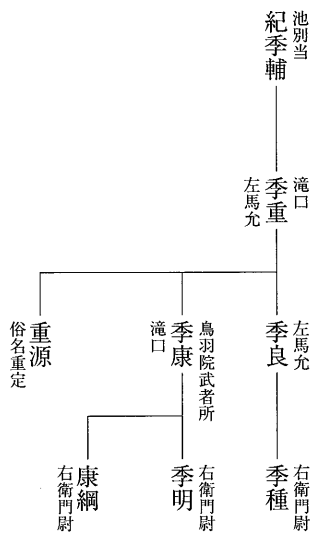
越後での流刑を赦された親鸞はなぜ京都に戻らずに東国を目指したのだろうか。大寺院の林立する奈良を活動の場としていた忍性はなぜ関東に向かったのか。<sup>①</sup>そして、この二人が拠点としたのが何れも常陸・下野の国境あるいは筑波山麓に近い宇都宮氏一族の所領内に位置したのはなぜなのか。そんなことを、当時の東国の文化環境を前提に考えることを本稿の課題としたい。

はじめに、平安末から鎌倉時代中期頃までの期間に活躍した何人かの僧たちの出自を検討してみよう。

まず貴族階級を見ると、南家藤原氏の出身で鳥羽院・後白河院の近臣として活躍した信西の孫にあたる貞慶（一五五〜一二一三）がいる。親鸞（一一七三〜一二六二）は日野家の出である。道元（一一〇〇〜一二五三）は撰閑家の一流である松殿家の出身である。

つぎに都で活動した武士（「京武者」）の家を出自とする者としては、歌人として知られ、北面の武士だった西行

(一一一八～一一九〇)、摂津渡辺党遠藤氏の一族である文覚(一一三九～一二〇三)、平家の郎等平重国の子で湯浅宗重の外孫にあたる明恵(一一七三～一二三二)があげられる。また、東大寺の復興に活躍した重源(一一二一～一二〇六)もその出自を調べると左記の如くで、内裏藏人所の被官である滝口や院の武者所に祇候して藤をつんだ後、馬寮の三等官である允、そして衛門府ないしは兵衛府の尉に到る昇進ルートを歩む典型的な京武者の一族の出身であった。<sup>2)</sup>『山槐記』(久寿二年八月二十八日条)に後白河天皇の滝口として紀重遠なる者が見えるが、彼もおそらく重源の一族であろう。



〔群書類従〕所収「紀氏系図」などによる

地方武士の出としてあげられるのは、美作の漆間氏から法然(一一三三～一二二二)、伊予の河野氏から一遍(一二三九～一二八九)がいる。また、栄西(一一四一～一二二五)は備中国吉備津神社家賀陽氏、叡尊(一二〇一～一二九〇)は大和国添上郡箕田里の生まれで興福寺の学僧慶玄の子、その弟子の忍性(一二一七～一三〇三)は

同国城下郡屏風里の伴貞行の子である。日蓮（一二二二～一二八二）も安房国東条御厨の在地領主の家に生まれている。

こうしてみると、武士や地方住人の中から優れた僧が輩出したことがうかがえる。そして都の貴族の出身である道元や親鸞も人生のかなりの期間を地方で過ごしていることにも注目される。また、東大寺や興福寺などの大寺院が林立する仏教のメッカともいべき大和を本国とする忍性が鎌倉幕府に招聘されるよりも前に坂東の常陸に下っていることも興味深い。越後での流刑を解かれた親鸞も常陸に向かっている。そこで、この二人が常陸を拠点に選んだ理由について考えてみよう。

注

(1) もちろん専門領域の世界では、さらに具体的な追究が加えられているが、通説的な理解では、親鸞は東国民衆への布教、忍性の場合は北条氏の招聘という説明がなされている。

(2) このような昇進ルートを歩んだ京武者としては、『平家物語』に「滝口入道」として登場する齋藤時頼（越前齋藤氏）や一族で讃岐目代を歴任した橘氏などの存在が知られる。なお、越前齋藤氏については山本陽一郎「北陸地域と比企氏―足田齋藤氏の御家人化の背景―」（京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』第三号、二〇〇五年）、橘氏については岩田慎平「小鹿島橘氏の治承・寿永内乱―鎌倉幕府成立史に寄せて―」（同 第八号、二〇一〇年）を参照されたい。また、重源の出自については拙稿「復興」をになった老僧重源と醍醐・日野」（『創造する市民』第一〇三号、京都市生涯学習振興財団、二〇一四年）で触れたことがある。

## 一 親鸞・忍性の東国下向

いわゆる建永の法難によって越後に流刑になっていた親鸞は、赦免されてから三年を経た建保二年（一二二四）、越後から信濃善光寺、さらに上野国佐貫庄を経て常陸国に向かい下妻庄に滞在の後、笠間郡（保）稲田郷に落ち着き、元仁元年（一二二四）には、ここで『教行信証』の草稿本を撰述している。<sup>①</sup>

親鸞が京都に戻らず坂東に向かった理由については、のちに「関東二十四輩」と呼ばれる高弟が常陸や下野などで開山するにおよんでいるので、専修念仏の弘通のためと断じることが出来るが、具体的にそういう結果が得られるような条件をもつ地域が選択されたはずである。また貞永元年（一二三二）以降の頃に京都に戻るまで、約二十年の長きにわたって居を据えたからには、そこには経済的な面だけではなく、彼の思索や著作活動を支えるための文化的環境も用意されていなければならなかったはずである。そう考えると、その背景としてはやはり今井雅晴氏の述べるように、<sup>②</sup>下野から常陸西・南部に勢力を有し、在京活動を活発に展開した宇都宮氏による招請と援助があったと考えるのが順当である。<sup>③</sup>

ただし、宇都宮氏と親鸞の関係については後世に成立した親鸞伝によるのではなく、宇都宮氏自体の文化性について一次史料に基づいて考察し、それを前提に親鸞招請の事情を考える必要がある。この点について従来の研究はかなり皮相的で疎かといわざるを得ないことを指摘しておきたい。

忍性もまた宇都宮氏の一族である小田氏の所領に下向している。彼は建長四年（一二五二）、八田（小田）時知の所領である常陸国小田郷に赴き、筑波山系南東端の宝筐山の山裾に壮大な堂塔群を整備した。三村寺（三村山極

樂寺)である。時の小田氏の当主は時知であつた。<sup>(4)</sup>

正元元年(一二五九)、忍性は北条重時の招聘に心じ、鎌倉極樂寺の寺地を相し、弘長元年(一二六一)、北条時頼・重時・実時らの支持を得て鎌倉に進出することとなる。<sup>(5)</sup>かくして一般に忍性の東下は北条氏の招請を前提にするものと理解されているが、しかし、それ以前に忍性が自らの居所を小田氏の所領内に求め、そこに長く住み続けた事情を再考する必要があるう。

注

- (1) 東国における親鸞の足跡については染瀬大輔「親鸞が来た道」野口実編「小山氏の成立と発展 軍事貴族から中世武士の本流へ」(戎光祥出版、二〇一六年)を参照されたい。
- (2) 今井雅晴『下野と親鸞』(自照社出版、二〇一二年)。
- (3) 平安末々鎌倉時代初期における宇都宮氏の存在形態については、拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」(同『東国武士と京都』同成社、二〇一五年、初出二〇一三年)、同「宇都宮頼綱—京都で活動した東国武士」(平雅行編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第三卷 公武権力の変容と仏教界』清文堂出版、二〇一四年)を参照されたい。
- (4) 糸賀茂男「忍性の開いた寺—三村寺—」(網野善彦・石井進編『中世の風景を読む 第二卷 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社、一九九四年)。
- (5) 和島芳男「忍性菩薩伝—中世における戒律復興の史的研究—」(中尾堯・今井雅晴編『日本名僧論集 第五卷 重源 叡尊 忍性』吉川弘文館、一九八三年)、平雅行「親鸞思想の変容」(同『歴史のなかに見る親鸞』法蔵館、二〇一一年)。

## 二 親鸞・忍性を外護した宇都宮氏の一族

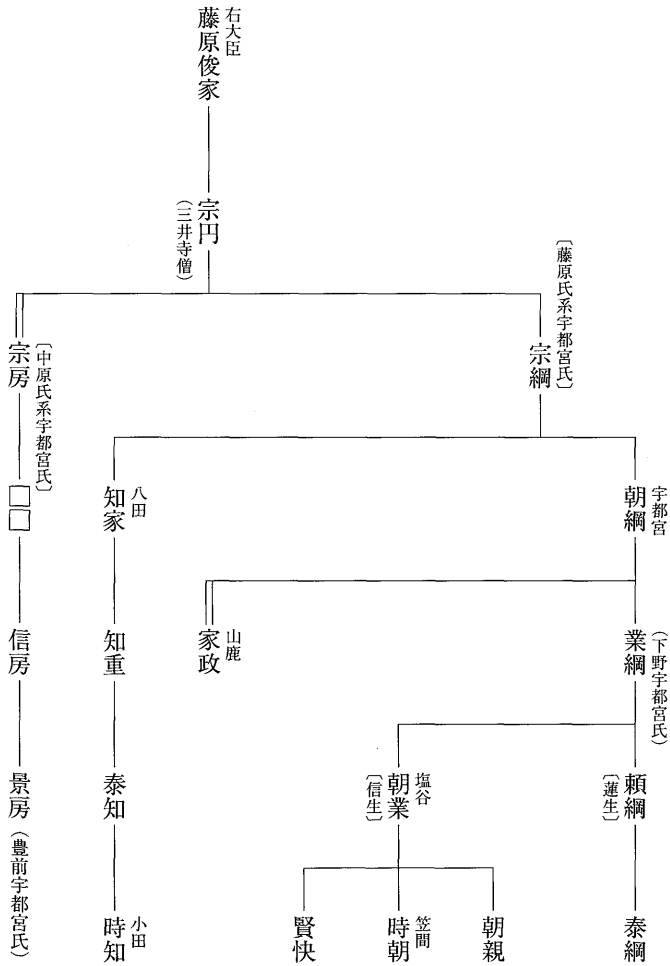
### (一) 親鸞を招いた塩谷朝業

親鸞・忍性ともに宇都宮氏の一族の存在を前提にして坂東に下り、その外護のもとに活動したのである。宇都宮氏の始祖宗円は三井寺僧であったが、源義家との縁故で下野に下向し、子孫は大きく常陸の八田(小田)氏と下野宇都宮氏の流れに分かれて発展した。鎌倉幕府成立の前後の時代、この一族の存在形態における特徴は在京活動が顕著なことで、宇都宮氏は幕府成立以前の坂東において圧倒的に文化的にステータスの高い武家であった。<sup>(1)</sup>

宗円の子宗綱は院武者所に祇候し、その子で八田氏の祖となる知家も武者所に祇候したが、若年の頃源義朝の猶子になったように、幕府成立後も源氏一門に進ずる処遇を受けている。知家の兄弟で宇都宮を称した朝綱は後白河院の北面に祇候し、平家政権下で左衛門尉に到っている。彼は平清盛の重臣平貞能の一族と姻戚関係にあり、平家没落後その旧領を継承したり、貞能の身柄を預かったことが知られる。そして、彼は源平の内乱に際し、天下が安穩に帰したら宇都宮社において一切経会を催行するという大願を発し、思いが叶うと本国に下向してそれを果たしている(『転法輪鈔』所収「宇都宮一切経釈表白」)。

藤原定家と姻戚関係を結んで「小倉百人一首」の成立に関わり、宇都宮歌壇を形成した宇都宮頼綱は、この朝綱の孫にあたる。<sup>(2)</sup>元久二年(一二〇五)、北条時政とその妻牧の方の失脚に連坐する形で出家を余儀なくされた頼綱(蓮生)は、承元二年(一二〇九)冬、摂津勝尾寺にいた法然を訪ね、その薦めにしたがって法然の高弟である善恵房証空に師事することになったという。蓮生は藤原定家が証空を「宇都宮随逐之師」と日記に書き記すほど証空

宇都宮氏一族系図



【尊卑分脈】などによる。宗円の出自については拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」を参照

を敬仰し（『明月記』安貞元年七月六日条）、弟の塩谷入道信生とともに、河内の叡福寺（磯長御廟寺）や摂津の淨橋寺などの寺院堂塔の造営事業を進めた証空を経済的に支援した。<sup>3</sup> また蓮生は、証空やその弟子たちを伴つて何度か宇都宮に下向することもあつた。<sup>4</sup>

さて、東国に下つた親鸞が二十年近くにわたつて居を占めたのは常陸国笠間郡稲田の地であるが、その領主は宇都宮頼綱の弟朝業、すなわち後の塩谷入道信生であつた。朝業は兵衛尉に任じ、兄の頼綱が出家した後、宇都宮氏を代表して幕府に出仕していたが、承久元年（一二一九）將軍実朝の死を悲しんで出家をとげ、同二年、上洛して証空の弟子となり、信生と称したのである。彼の所領は下野国塩谷郡と常陸国笠間郡で、親鸞が笠間郡稲田郷に落ち着いたのは彼がまだ在俗中のことであつた。したがつて、親鸞を笠間に招いたのは宇都宮（塩谷）朝業と考えるのが順当であらう。<sup>5</sup>

朝業は出家の後、しばらく在京していたが、元仁元年（一二二五）春、東国へ旅立つ。その歌日記が『信生法師集』の前半部分である。

ちなみに親鸞と摂関家の一流である九条家との関係は周知のところだが、その九条家の出身者が歴代の門主となつてゐる青蓮院に「宇都宮入道の子」である賢快が幕府の有力御家人三浦義村の子息である良賢とともに仕えていたことは注目される。寛喜三年（一二三一）、のちに天台座主となる慈賢が中宮御産の六字河臨法を修したときには、この二人が船上に控え、その郎従百余騎が川岸で船を守護しており、京都の権門寺院に入った有力御家人の子弟が武力と財力で奉仕した様子を垣間見ることが出来る。<sup>6</sup> 賢快の父「宇都宮入道」は頼綱とも考えられるが、『尊卑分脈』から信生（朝業）の子であることが知られる。



(二) 忍性を招いた小田時知

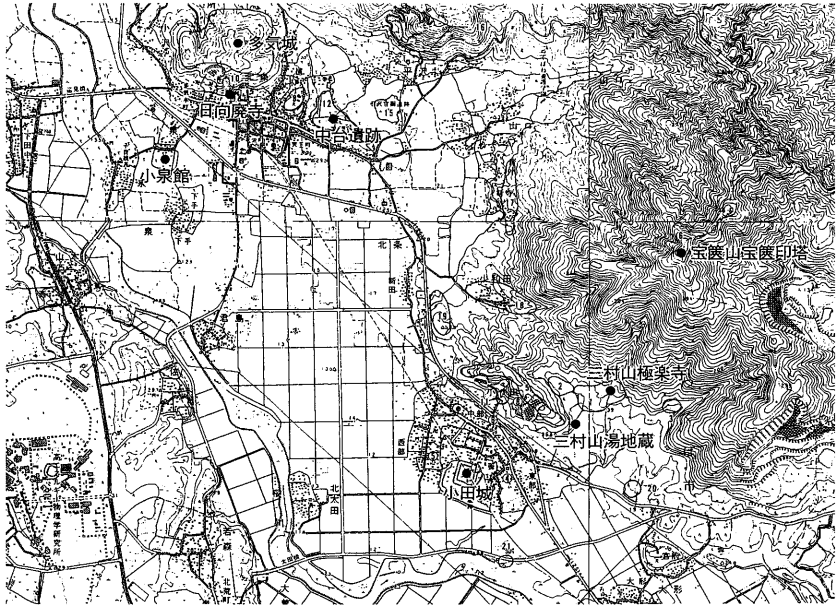
前述のように、忍性も親鸞の居た稲田に程近い常陸国南部の小田郷で十年ほどの間活動している。そして、当時の領主は小田時知であった。

小田氏の祖知家は若年の頃に武者所に祇候し、また源義朝の猶子であったことも手伝って、文治元年(一一八五)には右衛門尉に任じ、その後も在京して京中の夜行などにあたっており、その結果、源氏一族以外の関東御家人の中では北条時政について受領(筑後守)への任官を果たすという高いステイタスを有しており、宇都宮氏の一族として、やはり京都と密接な関係をもつ武士であった。

源頼朝挙兵前後の時代に、東国の在地勢力によって造営された浄土庭園をとまなう寺院としては、常陸平氏の日向廃寺(茨城県つくば市北条)、秩父平氏の平沢寺(埼玉県嵐山町平沢)、宇都宮(八田)氏の地藏院(栃木県益子町上大羽)などをあげることができる。このうち、とりわけ注目されるのが日向廃寺である。東西三間・南北四間の堂に複廊部と単廊部からなる翼廊をもつ宇治平等院と同じ臨池形式の阿弥陀堂で、常陸平氏の嫡流で十二世紀後半に活躍した多気義幹がその居館付近に造営したものと考えられており、藤原秀衡が平泉館の近くに平等院を模して造立したことで知られる無量光院を彷彿とさせるものがある。この常陸平氏の嫡流多気義幹を滅ぼし、その本拠地を含む筑波北条を支配下に収めたのが宇都宮朝綱の兄弟で時知には曾祖父にあたる八田知家である。

常陸平氏は筑波北条の三村郷に日向廃寺に示されるような浄土教的な空間をつくりあげていたが、十三世紀の半ばに至り、隣接する小田の地に居館を構えて小田の名字を名乗るようになった時知は、その遺産を克服する形で新たな宗教空間の構築を試みた。忍性による三村寺の整備はその到達点として評価できるのである。

おりしも鎌倉幕府においては宝治合戦を機に顕密仏教界が縮小され、幕府権力を掌握した北条時頼は禅律僧を登



三村山極楽寺周辺遺跡図

(桃崎祐輔「常陸三村山採集の永福寺系瓦と「極楽寺」銘梵鐘—三村山極楽寺の創建と八田知家をめぐる宗教環境—」より)

用する方針を示した。小田時知はこのような状況を先取りする形で忍性を招いた形になるのだが、その前提として宇都宮・八田（小田）氏一族の文化的水準の高さを指摘することができる。そして、この一族がその文化性を發揮・展開しえた背景として下野東部から常陸西・南部の地域に古代以来形成されてきた文化環境にも注目すべきであろう。堤禎子氏は常陸南部に聳える筑波山を「観音の浄土といわれた日光男体山を臨む、古くからの聖地であった。従って、この山を中心とする一帯は、古代以来の仏教文化の中心である」と評し、また小田氏が鹿島社を氏神とし、筑波山別当を一族内で掌握する存在であったことを指摘しているが、小田氏の本宗家にあたる宇都宮氏やその姻戚である小山氏の支配下にある下野東部地域も下野薬師寺や宇都宮社の存在が示すように古代以来仏教文化の光芒を放つ所だっ

たのである。<sup>(12)</sup>

注

- (1) 拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」、同「宇都宮頼綱—京都で活動した東国武士」。
- (2) 宇都宮歌壇については小林一彦「宇都宮歌壇の再考察」(『国語と国文学』昭和六三年三月号、一九八八年)を参照。
- (3) 小野一之「聖徳太子墓の展開と叡福寺の成立」(『日本史研究』第三四二号、一九九一年)。
- (4) 山本隆志「関東武士の在京活動—宇都宮頼綱を中心に—」(『史潮』新六〇号、二〇〇六年)。
- (5) 稲田の西念寺の伝によれば、親鸞がここに来たときの領主は頼綱の弟の頼重といい、同じ境内には彼の墓所も伝えられているが、その実在は確認できない。
- (6) 平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第四〇巻、二〇〇〇年。
- (7) 拙稿「執権体制下の三浦氏」峰岸純夫編『三浦氏の研究』名著出版、二〇〇八年、初出一九八三年、の注(10)を参照。
- (8) 日向廃寺をはじめとする小田氏進出以前の筑波北条における考古学的研究成果の概要については大関武「中世筑波北条の歴史的景観—小泉館を中心に—」(市村高男監修・茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界—筑波山・霞ヶ浦・利根川—高志書院、二〇〇七年)、平沢寺については企画展図録「武蔵武士と寺院」(埼玉県立嵐山史跡の博物館、二〇〇六年)大庭の地藏院については大澤伸啓「鎌倉時代関東における浄土庭園を有する寺院について」(『唐澤考古』第一二号、一九九三年)を参照。
- (9) 網野善彦「常陸国」(同『日本中世土地制度史の研究』塙書房、一九九一年)。
- (10) 糸賀茂男「忍性の開いた寺—三村寺—」(網野善彦・石井進編『中世の風景を読む』第二巻 都市鎌倉と坂東の海に暮らす)

新人物往来社、一九九四年)、桃崎祐輔「常陸三村山採集の永福寺系瓦と「極楽寺」銘梵鐘―三村山極楽寺の創建と八田知家をめぐる宗教環境―」(『歴史人類』第三一号、二〇〇三年)。

(11) 堤禎子「常陸・北下総における律宗教団の痕跡」(『鎌倉』第六六号、一九九一年)。なお、鹿島社と京都・鎌倉あるいは小田氏・宇都宮氏との文化的関係については、中川博夫「鹿島の宗教文化圏―和歌をめぐる―」(『国文学 解釈と鑑賞』第六七巻第一号、二〇〇二年)を参照されたい。

(12) 鎌倉時代前後の下野薬師寺については、永村眞「下野薬師寺の再興」(『栃木県史研究』第二〇号、一九八一年)を参照されたい。また、そもそも宇都宮氏の始祖である宗円が摂関家の庶流の出身で、河内源氏と所縁の深い三井寺(園城寺)の僧であったことも(拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」参照)、宇都宮氏周辺における仏教化振興の背景として銘記されなければならないであろう。

### 三 鎌倉幕府の宗教政策との関わりから

東国武士は質実素朴・無知文言であって、京都の貴族文化と対極的な存在のように語られがちであるが、実は鎌倉幕府草創期の頃、將軍や北条氏、それに御家人たちは優れた僧侶を競って迎えようとしたが、それがなかなか難しく、しかるがゆえに、嘉祿の法難(一二二七年)で陸奥に流罪になった隆寛を毛利季光(大江広元の子)が保護したように、様々な事情で畿内に活躍の場を見出せなくなった僧侶を積極的に迎え入れようとしていたとい<sup>1)</sup>う。したがって、東国下向を志した仏教者は寄寓先を選択する立場にあり、当然そこには容易に經典が得られるような文化的な環境が備わった地が求められたことであろう。親鸞が笠間に下った第一の理由は奈辺にあつたとみてよい。

しかし、やがて体制化した幕府は自らの権力の安定をはかるために、作善を評価せずに社会規範をゆるがせにする造悪無碍（破戒をやむをえないものとする）の専修念仏に対して弾圧の方針をとるようになる。<sup>(2)</sup>さらに將軍権力と北条氏得宗が対立した挙句、宝治合戦で得宗が勝利を収めると、それまで將軍とその実家である九条家などによって京都から招かれていた顯密僧に代わって齋戒を重視する禪律僧が北条氏得宗によって幕府の保護を得るようになった。<sup>(3)</sup>こうした状況下、法然門流でも持戒念仏派が鎌倉への進出をはかり、とくに鎮西派の良忠は下総国匝瑳南条庄地頭の椎名氏などに迎えられて活発な布教活動を展開したことが知られる。<sup>(4)</sup>常陸西部の笠間から親鸞が去った後、近隣の小田に忍性が止住することになった背景には鎌倉幕府の宗教政策の変動があったのである。彼らを招いた宇都宮一族には先見の明があったともいえるが、先述のように、この笠間や小田の地が親鸞・忍性を惹きつけるだけの文化的に魅力ある空間であったことこそが重要であろう。

ちなみに、宇都宮氏一族と律宗とのかかわりについて、忍性の問題とは直接関わりがないと思われるが、鎌倉幕府成立期に活躍した中原氏系の宇都宮氏の信房が、京都泉涌寺を拠点に北京律宗を興した俊苻の外護者であったことも付け加えておきたい。<sup>(5)</sup>

注

(1) 平雅行「親鸞思想の変容」。

(2) 平雅行「親鸞思想の変容」。嘉祿二年（一二二六）正月、幕府は所領を賭けた双六・博戯を禁じているが（『吾妻鏡』同二二 十六日条）、建長二年（一二五〇）十一月にいたって、さらに陸奥・常陸・下総を対象にして博奕禁止令を発し、それぞれの守護にその取り締まりを命じている。常陸・下総が親鸞の布教圏に重なるのは偶然といえないであろう。

(3) 平雅行「親鸞思想の変容」。

(4) 大橋俊雄「良忠の東国教化と教団形成の過程」(『歴史地理』第九〇巻第二号、一九六一年)、同「良忠の東国進出と鎌倉蓮華寺」(『三浦古文化』第一七号、一九七五年)、梶村昇「聖光と良忠―浄土宗三代の物語―」(『浄土宗宗務庁』二〇〇八年)。

なお、椎名氏については、拙稿「下総国匝瑳南条庄地頭椎名氏について」(同『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九七七年)を参照されたい。

(5) 宮崎圓遵「泉涌寺の建立と宇都宮信房」(石田充之編『鎌倉仏教の成立 俊苧律師』法蔵館、一九七二年)。なお、宇都宮氏の本流(藤原氏系)と中原氏系との関係については、拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」、信房の系統の鎮西進出について、拙稿「治承・寿永争乱ともなう鎌倉勢力の鎮西進出について」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二八号、二〇一五年)を参照されたい。

### おわりに 課題と展望

親鸞はなぜ東国を目指したのか。忍性はなぜ常陸に向かったのか。そのような疑問に対して、受け入れた側の在地武士の存在形態や地域の文化的環境について考察を加えてみた。

ここで得られた新たな知見(それはほとんど先学の研究成果に基づくものであるが)によって、鎌倉幕府の宗教政策を踏まえて、東国における仏教勢力の地域的偏差や交代についても見通しが得られたように思う。本稿では十分に取り上げることの出来なかつた然阿良忠の活動や宇都宮氏同様に歌壇で活躍した東(木内)氏一族から渡元を果たして六波羅に那蘭陀寺を創建した道源(木内胤直)や建仁寺に属する禅僧が輩出した背景、また建長の政変に

連坐して捕縛された千葉氏一族の出身で九条家に仕えた顕密僧了行の問題などである。<sup>①</sup>先に房総半島の先端・安房の地で鎌倉仏教の一翼をになう日蓮が育った背景について考察したが、<sup>②</sup>これらも含めて中世前期における東国の文化環境についてさらに検討を加えていきたい。

中世武士論を専攻する私の目的とするところは、政治史の立場からこの時代の東国武士の存在形態を説明することにある。仏教史は専門外である。東国武士を非文化的存在とみなす従来の理解に疑問を持ったがゆえに、まったく未知の領域に足を踏み込んでしまった感がなきにしもあらず。おそらく多くの誤解や誤りがあるのではないかと危惧する。

しかしその一方で、現在大きな勢力を有する諸宗派の祖師に対する仏教史研究者の姿勢には同じ歴史学者として疑問を呈せざるを得ない部分のあることも否定できない。<sup>③</sup>もともと僧侶の立場にあつたり、宗門に属している研究者にとつては実証的な理解よりも信仰心が優先されることもあるからだろう。

ともあれ、歴史学の成果から得られたこの時代の社会のあり方に関する情報、すなわち、様々な局面における制度や故実、そして身分秩序、あるいは文書発給の形態などに関する知識を前提にしなければ、科学的な検証に耐えうる祖師伝の理解・説明は不可能なのである。まさに自己満足の言とならざるを得ないが、そんな観点から、本稿が中世仏教史の研究に少しでも裨益するところがあれば幸いとするとところである。

(1) 了行・道源については以下の拙稿を参照されたい。「了行の周辺」『東方学報』(第七三冊、二〇〇一年)、「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元―武士論の視点から―」(『鎌倉遺文研究』第二五号、二〇一〇年)、「鎌倉時代における下総千葉寺由縁の学僧たちの活動―了行・道源に関する訂正と補遺―」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二四号、二〇一一年)。

(2) 拙稿「中世成立期の安房―源頼朝上陸の背景―」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第三〇号、二〇一七年)。

(3) 当該ジャンルの歴史学研究者からも、このような意見が呈せられている。安藤弥氏「親鸞に対する一般的関心におけるひとつの傾向として史実と伝承の区別を理解しない発言者が増え、史実を確定させる歴史学的基本手法を知らない人が自由気ままに伝承を史実だとして発言するという、非常に憂慮すべき事態がある。」(二〇〇九年二月二十六日、国鉄会館に於いて行われた中世史研究会例会の報告「親鸞後半生の歴史的背景―近年の親鸞伝研究への批判もこめて―」のレジюме)。平雅行氏「確実な史料からどこまでのことが究明でき、どこから先が分からないのか、そのギリギリの線を指し示すのが、歴史研究者の仕事だと私は考える」「史実と伝承を混濁させ、想像の世界にまで立ち入るのは、歴史家としての本分を忘れた僭越な行為であると私は考える」(二〇一一年、法蔵館より刊行された『歴史のなかに見る親鸞』の「あとがき」)。

〔付記〕本稿は京都女子大学宗教・文化研究所客員研究員としての二〇一六年度における研究成果の一部である。

〈キーワード〉

宇都宮氏 親鸞 忍性